

■学校経営のポイント

体験格差を学習格差にしない

喜名 朝博

子どもたちの体験格差が課題となる中、夏休みの体験発表会や作品展などは簡単に済ませ、なるべく早く日常の教育活動に戻そうとする学校が増えてきた。夏休みの過ごし方に対する過度な期待やプレッシャーから保護者や子どもたちを解放する視点も必要になっている。

体験を価値ある経験にする

デューイの「為すことによって学ぶ」「Learning by doing」が示す「為すこと」とは、具体的な行為そのものである「体験」を指す。それによって学ぶとは、そこから気づきや知識、概念を獲得していくことであり、ここには「振り返る」という思考の過程が欠かせない。

体験は振り返り(リフレクション)によって「意味ある経験」として自分の身になっていく。その意味では、夏休みの絵日記や自由研究などは、体験を意味ある経験にするための重要なツールであった。

一方、それは、差を比べる場となり、体験格差を浮き彫りにするという危険性をはらんでいた。さらに、体験格差の認知は、子どもたちの自尊感情を低下させることもある。

体験の内容よりも気づきに焦点をあてる

体験の本質は、そのことを通して子どもたちが何を考え、何を獲得したかであり、体験の希少性やまして経済的側面には何の意味もない。さらに、他者と共有できなければ教育的価値も低い。この体験の意味を保護者にも伝え、安心してもらいたい。

学校が行うべきは、子どもたちが体験を通して獲得した気づきや学びを共有することである。たとえば、「電車のドアを開けるときは自分でボタンを押したんだよ」と旅行での体験を報告した子どもは、電車のドアは車掌さんが開けてくれるものと思っており、小さな発見と驚きを素直に表現している。それを聞いて、

「そうなんだ」と口にする子もいれば、「そんな電車に乗ったことあるよ」と自分の体験を想起する子もいるだろう。「車掌さんがいなくて、運転手さんがドアを開けていたよ」といった発言によって、電車のドアの開閉についての概念が拡大していく。「なぜ自分で開けるのだろうか」と教師が投げかけられれば、乗降客の数や冷暖房効率について考え始めるかもしれない。そして、いつか自分が同じ体験したときに「このことか！」と、その場面と記憶が結びつくことが重要なのだ。

体験格差を学習格差にしない

思考すること、何かを理解することは、これまでの知識や経験を想起ながら照合し、再構築していく作業である。したがって、そのための知識や経験が豊かであればあるほど、思考が深くなり、理解も容易になる。体験格差が問題になるのは、この照合する材料が少なく、学習格差につながるためである。

今西祐行の『一つの花』に登場するプラットホームの場面は、線路に挟まれた島式ホームとその先にあるコスモスを想像する必要がある。そんなホームを見たりそこに立ったりしたことがある子と、そうでない子とでは、その情景描写がもつ意味理解に差が生じる。

そこで、教科書の挿絵を活用したり、映像を見せたりして、読解を助けるイメージを丁寧につくっていくことで学習格差が埋まっていく。

体験的学習の日常化を

体験格差を学習格差にしないためにも、体験的な学習の充実が求められる。難しく構えることなく、触れる・作る・動くといった感覚的な活動を日常的に授業に取り入れることを目指したい。そして、同じ体験をしても人によって感じ方や気づきが異なるという「違い」を大切にしていきたい。

(きな・ともひろ=国士舘大学教授/全国連合小学校長会顧問)

「オンライン研修会」マネジメント力向上コースに新講義が追加！

若手を守り育てる学校のつくり方

【講師】 宮澤一則 (東京都板橋区立中台中学校統括校長)

■「オンライン研修会」の詳細は、右QRコードより小社HPをご覧ください。



2025年度
教育管理職オンライン研修会

学校マネジメント力
向上
コース

申し込み